
【遊戯王5D's】をかってに映画化してみた【デュエルもあるよ！】

K

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【遊戯王5D's】をかってに映画化してみた【デュエルもあるよー！】

【Nコード】

N5135Q

【作者名】

K

【あらすじ】

これは、遊戯王5D'sのダークシグナー編終了後の物語。ダークシグナーの危機が去って、シティとサテライトは融合し、平和が訪れていた。

しかし新たな脅威はもう、すぐそこに忍び寄っていた…。

デュエルもあるよ

1・序章 a

注意

これは、遊戯王5D's好きの作者が、暴走気味で作ったモノです。著作権違法してないと思います。

それでは、どうぞ。

追記：作中のライディングでは、魔法カード使用が可能です。

できるだけ、元の作品の雰囲気を出そうとしましたが、ある理由で、魔法カードを使いたいので…

作者の力量不足でもありません。すみません。

これは遊星たちがダークシグナーを倒して数週間後の夜ことである

あるビルの前で、牛尾ウシオ巡查長こと、牛尾ウシオ 哲テツはバイクに跨またがっていた。手に持っているトランシーバーからは時折報告する部下の声が漏れている。

2

セキュリティA「こちら、A班。突入の準備整いました」

セキュリティB「こちら、B班。同じく、準備整いました」

牛尾 「よし。準備は整ったな？全隊、突入しろ！」

セキュリティA & amp ; B 「はい！」

目の前のビルへ隠れていた部下たちが一斉に突入し始める。彼に匿名の通報があったのは3日前のことである。

〈回想シーン〉

セキュリティ内牛尾デスク。

ダン！（牛尾がデスクを叩く音）

牛尾「収容所の脱獄計画だと!？」

?「確かな情報です」

牛尾「いつだ?」

?「3日後の午前3時20分。夜明けの巡回前に脱走するようです」

牛尾「脱走するのは誰だ?」

?「Zランクの囚人たちです」

牛尾「Zランク!？」

収容所の囚人たちはアルファベットでランク付けしてある。

AやB、Cランクは軽犯罪などであるが、アルファベットが後になればなるほど、罪状は重くなっていく。

Zランクともなれば、もはや伝説級の犯罪者である。牛尾は見たことすらない。

牛尾「そうか、通報してくれるのはありがたいが…」

そこで、牛尾は言葉を強くした。

牛尾「おめえは誰だ?」

ガチャ… ツーツーツー…

牛尾「おい?…おいッ!…!」

牛尾「（最初はただの悪戯だと思った…だが、

囚人どもは収容所から脱獄しちまった…。

幸いヤツラの居場所はマーカーで筒抜けだ。

ヤツらは今、このビルの中にいる…。

もう逃がさねえぞ!」

部下が突入してから数分後、ビルの地下から何か音がきこえてきた。

牛尾「ん？なんだ？…」

(これは…D・ホイールの起動音ツ！?)

牛尾が気付いたとき、複数のD・ホイールが地下から飛び出した。

牛尾「何イツ！？…おイツ！待ちやがれえツ！」

牛尾も慌てて追いかける。

だが、相手も早くなかなか追いつけない。
いつの間にかシティの中心から遠ざかっていた。

牛尾「(チツ…なかなかやるじゃねえか…ん？この道のりは？まさか…」

コイツらサテライトに逃げこむつもりなのか？…冗談じゃね

エ！…それなら…！」

牛尾「強制的にデュエルだ！」

？「…！」

デュエルモードスタンバイ スピードワールド2をセットしてください

牛尾「そう簡単に逃がさねえぞツ！」

？「コイツは私が片付ける。お前らは先に行け」

残りのD・ホイールがスピードを上げた。

牛尾「おい！待て！」

？「焦るなよ。どうせお前はここで死ぬ。私に逆らったことを後悔するがいい」

牛尾「ほう…言っじゃねえか！いくぞ！」

デュエル！ 牛尾VS？

？「私が先攻を取ろう。ドロー…カードを3枚伏せ、ターン終了だ」

牛尾「へッ…デカイ口叩く割りには手札事故か？

(ここは一気にケリをつける…！)

オレのターン ドロー…

オレ は 【サムライソード・バロン】を召喚！そして手札から魔法カードを発動【デュアルサモン二重召喚】！

このカードの効果により、オレはこのターンもう一度だけ通常召喚を行える

手札から、【トラパート】を通常召喚！

レベル4【サムライソード・バロン】にレベル2【トラパート】をチューニング！

貴様を葬るモンスターだ！よく目に焼きつけな！シンク口召喚！であえ、《ゴヨウ・ガーディアン》！」

？「(シンクモンスター！？…やはりお前たちはオレの邪魔をするのか…！)」

牛尾「さっきのセリフはお前にそのまま返すぜ！ゴヨウガーディア

ンで、ダイレクトアタック！」

牛尾 LP 4000 VS ? LP 1200

牛尾「カードを3枚伏せ、ターン終了だ！」

（お前がどんなカードが伏せたか知らねえが…無駄だ…！

オレが場に伏せたカードは【聖なるバリアミラーフォース】と

【魔宮の賄賂】に【王宮のお触れ】

どんな魔法でも【魔宮の賄賂】で、攻撃は【聖なるバリアミラーフォース】、罠なら【王宮のお触れ】がある。オレの勝利は揺るがない！」

?「だが…」

牛尾「？」

?「お前たちがいくら邪魔しようとも…！」

”私は負けるわけにはいかないッ！”

?「エンドフェイズに罠カードを発動！【針虫の巣窟】！

このカードの効果により、自分のデッキの上から、5枚のカードを墓地に送る！」

牛尾「自分のカードを墓地へ送るだっ!! 何考えてんだ！」

?「私のターン…ドロー! ……」

墓地に閻属性モンスターが3体のみ存在する場合、このカードは特殊召喚できる」

牛尾「ん？お前何言ってるんだ？」

？「私は、手札から【ダーク・アームド・ドラゴン】を特殊召喚！」

牛尾「…！何だこのモンスターはッ？

（嫌な気配がしてやがる…こりやあまるで…ダークシングナーのモンスターだぜ…！）」

？「さらに、魔法カード発動！【火竜の火炎弾】！お前のLPに800ポイントのダメージを与える！」

牛尾「へッ！これぐらい、どうってこたないぜ！」

牛尾LP 3200 VS ?LP 1200

？「ここで、【ダーク・アームド・ドラゴン】の効果を発動！自分の墓地に存在する闇属性モンスター 1体をゲームから除外する事で、フィールド上に存在するカード1枚を選択して破壊する！」

その3枚の伏せカードを破壊しろ！」

牛尾「…！！（畏が全て消し飛んじまった…！だが、あのモンスターと【ゴヨウ・ガーディアン】の攻撃力は互角…戦闘破壊はされないはずだッ！）」

？「魔法カード発動！【フォース】このカードの効果により【ゴヨウ・ガーディアン】の攻撃力の半分 を【ダーク・アームド・ドラゴン】に加算する！」

牛尾「フォース!？」

？「【ダーク・アームド・ドラゴン】で【ゴヨウ・ガーディアン】に攻撃！」

ダークエンド・ヴァニッシャー！

牛尾「うおおー！」

牛尾LP 400 VS ?LP 1200

？「分かったか。私とお前の実力差を…さあ、早くサレンダーしろ」

牛尾「まだだ…まだ…終わらねえぞ…！」

？「往生際の悪い男だ…」

牛尾「黙れ…！オレが折れちまつたら…誰が…誰がネオ・ドミノシテイを守るんだよ…！」

？「愚かな男よ…最後のチャンスを無駄にしおって」

牛尾「デュエルは…LPが0になるまで終わらねえ！」

？「ならば…死ね！ 畏カード発動！【閻次元の開放】

除外されている閻属性モンスターを1体、自分の場に特殊召喚する！」

牛尾「（なんだ…あのモンスターは！）」

？の場に黒い影に包まれたモンスターが出現した。

？ 「お前の負けだ」

牛尾「くそおおお！」

2・主人公登場

…ブルーアイズマウンテン。

そのコーヒーは他のどのコーヒーよりも苦味がある。ただし、その苦味は厳選された豆にしか出せないもの。つまり、神に選ばれたる至高にして、雅で高貴なる味。

ジャック「お前もそう思わんか？クロウ？」

スパ　ン！！

クロウがジャックの頭を勢いよく叩く音が室内に響く。

クロウ「ふざけんじゃねえ！お前の飲むそのコーヒーは、1杯3000円もするんだぞ！

しかも、その金は遊星とオレが稼いだ金だろ！…そんなに悠長に

コーヒー飲んでる暇があったら、仕事を探して来い！この二トキング！」

ボロクソに言うクロウ。頭には黒いヘルメット。配達帰りなのだろう。

ジャック「働いていない訳ではない！…オレを雇うところがないのだ」

それまで読んでいた新聞とコーヒーをテーブルに置いて、鬱陶しそくに反論するジャック。

クロウ「何だと！」

遊星「クロウ、やめないか。ジャックだって、働きたくない訳じゃないんだ」

何やら機械を調整していた遊星は作業を一旦止めてジャックを庇う。

クロウ「遊星！そうやって甘やかしてるからコイツは働かないんだよ！もつとガツンと！」

クロウがお説教を再開しようとしたその時、

アキ&ルカ「こんにちは」

ドアが開き、アキとルカが入ってきた

遊星「ああ、アキ、ルカ。久しぶりだな」

微笑む遊星。

クロウ「おう！久しぶりじゃねえか！」

ジャック「何だ。近頃はめつきり顔を出さなかったな」

アキ「アカデミアはこの一週間、テストだったのよ」

ルカ「私は分かんない問題多かつたよ」…アキさんはどうだった？」

アキ「うん。ばっちし 分からない問題は、遊星が教えてくれたもの」

ウィンクしながら答えるアキ。

クロウ「そうなのか？遊星？」

初耳という顔でクロウが尋ねる。

遊星「アキは筋がいいんだ。オレが途中まで説明したら、あとは自分の力だけで大丈夫だった」

ルカ「え〜いいな〜！遊星、私にも勉強教えてよ〜！」

遊星「ああ。分からない問題があったら、ここに来るといい」

ジャック「ん？そういえば、ルアはどうした？」

ジャックが言うと、ルアがいきなり入ってきた。

ルア「遊星！直った？直った？」

ジャック「何だ。いきなり騒々しい！」

眉をひそめるジャック。

遊星「直ったぞ」

遊星はさっきまで弄っていた機械をルカに放り投げた。

ルア「うわ〜！ホントに直ってる！ありがとう遊星！」

ルカ「このゲームが気になってたの？」

ルア「うん！テスト前に壊れちゃって」

ルアは大事そうにそれを抱えた。どうやらゲーム機らしい。

ルカ「それを心配するのはいいんだけど、テストは大丈夫なの？」

心配そうにするルカ。

ルア「うッ！……は、ははは。なんとかなるよ！なんとか……」

痛いところを突かれたというように、苦しく笑うルア。

クロウ「こら、ルア。そんなに勉強しないと……」

怖い顔して脅すクロウ。

クロウ「…ジャックになっちまうぞ」

ジャック「こら、こら……」

2・主人公登場（後書き）

次話から本格的にお話がスタートします^^
今回は筆慣らしということでOTZ

3・招待状

クロウをヘッドロックしているジャックは完璧に無視して、アキは遊星に話しかけた。

アキ「そういえば遊星。これ、ポストに入ってたわよ。」

アキは一枚の封筒を差し出した。

遊星「オレに？」

裏返すと、宛名は遊星、クロウ、ジャック、アキ、ルカ宛。

ルア「誰からきたの？」

アキ「とりあえず空けてみたら？」

遊星「そうだな」

「拝啓 シグナーの皆様

突然のお手紙をお許しください。

数週間前に起こった恐怖の事件を解決し、

ダークシグナーと呼ばれる者たちを倒してくださったのは、貴方達だったと伺っています。

今ではシティの中枢部にあるモーメントの機能も無事復帰し、

ネオドミノシティに平和が戻りつつあります。

つきましてはシティ、サテライトの融和記念して、祝賀パーティーを開催する予定です。

このパーティーにあなたたちは欠かせません。X日の夕刻6：00。
ドミノ埠頭にお越しく下さい。パーティーへの参加心よりお待ちしております。

敬具

お連れの方がいる場合は、同封されている余分のチケットをお使いく下さい。」

遊星「祝賀会…？」

アキ「X日って…今日じゃない？」

祝賀会という言葉を引きいて、ジャックとクロウはこっちを向いた。

ジャック「パーティーだと！ちょっと貸してみる。……おい、遊星。これは行くしかないだろう。」

ジャックの目はキラキラと輝いている。

クロウ「ふん。まあ悪い誘いじゃなさそうだな。」

クロウは紙をヒラヒラさせているが、口元は笑っている。

遊星「二人が言うのなら、行ってみようか。」

ルア「へん。どうせオレは仲間ハズレですよ。」

部屋の隅でイジケているルアの肩に手を置くルカ。

ルカ「大丈夫。チケットはもう一枚あるから。ルアも一緒に行こ？」

ルア「…！…ありがとう〜ルカ〜！」

ルカに抱きつくルア。

クロウ「…そういえば、余分のチケットはどうすんだ？」

遊星「連れか…誰にしよう」

遊星の頭の中には鬼柳の顔が浮かんだ。

しかし彼はあの事件以来、行方が判らなくなっている。

クロウ「アキは？」

アキ「私は、お父さんと呼んであげようかな」

微笑を浮かべながら応えるアキ。

遊星「…。アキ」

アキ「何？」

遊星は自分の余ったチケットをアキに差し出した。

遊星「お母さんも連れて行ってあげるよ」

アキ「え？でも…」

遊星「いいんだ。別に呼ばなきゃいけないヤツもないしな」

アキ「遊星…うん。そうする…ありがとう 遊星」

しかめ面で考え込んでいるクロウ&ジャック。

クロウ「(うーん…じゃあ、オレのチケットどうするかな…)」

ジャック「(パーティーか…何を着ていこう…)」

遊星「よし。じゃあ全員、6:00にドミノ埠頭に集合しよう」

ルア「OK!こうしちゃいられない!帰って支度しなくっちゃ!」

ルカ「あゝ、待ってよルア〜!」

ルカとルア退出。

アキ「私も着替えてくるわ。じゃあね」

遊星「ああ。」

ジャック「…(服…)」

クロウ「…(チケット…)」

4・ドミノ埠頭

ドミノ埠頭（遊星）

ドミノ埠頭の時計塔が6時を示す。

辺りは薄暗くなりポツリポツリと街灯も付き始めている。

昼間は働いていた太陽も、今は地平線の向こうに沈もうとしていた。

ドミノ埠頭に重々しい汽笛が鳴る。

ポォー

ジャック「6時だな」

ジャックの服装はいつも通りだ

服装は迷いに迷って結局いつもの服装に落ち着いたようだ。

クロウ「あいつら、まだ来ねえのか？」

辺りを見回すクロウ。

遊星「多分、そろそろじゃないか？」

??「ごめん。待った？」

遊星が振り返ると、そこにはアキが立っていた。

ただ、いつもの服装ではない。彼女の髪に合わせた紅いドレスを着ていた。

クロウ「うわ〜…こりやすげえ」

遊星「似合ってるじゃないか」

アキ「ありがと。そう言えばルアとルカのことだけど」

ジャック「あいつらはどうしたんだ？」

アキ「それが、あれからルアが熱を出して寝込んで…」

ルカはルアの看病をするから、二人とも来れないって」

ジャック「何！」

遊星「それは心配だな？大丈夫なのか？」

アキ「ただの風邪みたい。テストが終わったから気が抜けたのかも
しれないわ…」

…

回想シーン アキが自分の家で電話中。

ルカ「そう言う訳だから、パーティーにはいけないわ…」

アキ「それは大変じゃない！今からそっちに行くわ！」

ルカ「それじゃアキさんがパーティーに行けないじゃない！

私たちは大丈夫だから、アキさんはパーティー楽しんできて」

アキ「ルカ…」

…

遊星「それじゃあ仕方ないな……」

クロウ「それなら、アイツらの分まで精一杯楽しまないと！なあ、遊星」

遊星「クロウ…そうだな」

ジャック「それなら、これで全員だな。早く行かないと船が発射してしまうかもしれん」

アキ「そうね。早く行かないと」

こうして一行は船へと歩き出した。

ドミノノ埠頭(?)

どうやらここが目的地らしい。

彼女は辺りを見渡す。

人、人、人。

でも、彼は居ない。

しかし、自分がこの場所に居るということは、彼もココの何処かに居るということだ。

それにしても…

「この姿も久しぶりね」

彼女は誰にでもなくそう呟いて、船に向かって歩き始めた。

長くて青い髪を靡^{なび}かせて

ドミノ埠頭 (カーリー)

ダダダダダッ
…

カーリー「あゝもう！何でこんな時に、車がパンクするのよー！」

どうやらそろそろ船が出港する時間のようだ。
着飾った彼女が走る姿はコントチックである。

ドンッ！

カーリー「きゃッ！」

男「うわッ!？」

あまりに急いでいたためか、前の歩行者にぶつかるカーリー！

男「痛てて…」

カーリー「す、すみません！大丈夫ですか!？」

男「いえいえ、たいしたことありませんよ」

カーリー「あゝ…でも、服とか汚れちゃてるし！」

男「別に高価なものではありませんので。それより、急いでいたんじゃないですか？」

カーリー「（ハッ！）そ、そうだった〜！う〜…す、すみませんでした〜！」

走り去っていくカーリー

カーリー「（ふう〜…うつかりしてたんだから…あれ？でも、さっきの人どこかで見えたような…？）」

ドミノ埠頭（？）

少年は逡巡していた。

彼は船に乗る権利はあった。

それは長年の夢の実現することでもあった。

が、臆病な彼は自分に、自分のデッキに、自信がなかった。

「大丈夫…少し緊張してるだけ…」

少年は自分を奮い立たせて乗船した。

?? (???)

暗く、ひたすら暗い闇の中、彼の意識は覚醒した。

??「時は満ちようとしている……もうすぐだ……もうすぐ我らの
念願は成就する……」

手駒はそろい、舞台も整った……だが……残された時間はあと
わずかしかない……

成就が先か……はたまた時間切れか……いや時間切れなどさせ
るものか……私の未来は」

私が決める!!

誰も居ない暗闇の中、??は叫んだ。

様々な思いを乗せた船はX日午後6:30、ドミノ埠頭を出港した。

5・祝賀会(前)

…ざわざわ

遊星たち一行は乗船したとたん、VIPな待遇を受けていた。パーティー会場での彼らの席は特別に用意されており、料理は見た事がない高そうな料理が次から次へと運ばれてくる。

アキ「なんだか…こんなの悪いわね」

クロウ「りゅふせい、りゅふせい。これはうはいふお？」

クロウはたくさん料理を頬張りすぎて、もはや顔はハムスターである。

ジャック「おい。食いすぎだぞ」

と言いつつジャックの目の前にはたくさんの空になった皿。どうやらこれは全部彼が食べたものらしい。

遊星「まあ、たまにはいいんじゃないか」

遊星も笑っている。

カーリー「あゝ！やっと見つけたんだから！」

カーリーが遊星たちのテーブルにやってきた。

ジャック「遅かったな」

食後のブルーアイズマウンテンを飲みながら返事をするジャック。

カーリー「も〜！置いてくなんてひどいじゃない！」

ジャック「お前が来るのが遅いからだ！」

何故かカーリーにはSのジャックでした。

カーリー「そうそう、牛尾さんの事…聞いた？」

遊星「牛尾がどうかしのたのか？」

カーリー「それが…」

カーリーは牛尾のことを皆に話した。

アキ「牛尾さん…」

心配そうな表情のアキ。

遊星「容態は？」

カーリー「命は助かるそうだけど…重症だっつて」

言いにくそうに話すカーリー。

ジャック「それより、そのZランクの囚人とはなんのことだ！」

クロウ「そんな存在聞いたことないぜ！」

カーリー「私も気になって調べたのよ。そしたら…なんだか胡散臭い話が一杯出てきたんだから！」

カーリーは持っているバックからメモ帳を取り出した。

カーリー「いい？シティはデュエルモンスターとモーメントあつての街じゃない？」

て言うか、そもそもモーメントとデュエルには深い関係があるみたいなの！

モーメントが不安定だとデュエルに支障をきたすし、デュエルモンスターの”バランス”が崩れればモーメントも不安定になる。

そんな微妙な相互関係で成り立ってるんだって」

遊星は天秤を思い浮かべた。片方の手にはカード、もう片方の手にはモーメントが乗っている。

遊星「バランスか…」

カーリー「そして、その”バランス”が崩れた時、モーメントも不安定になって…」

再び、ゼロ・リバーズが起きる」

遊星「！」

カーリー「そう言ってる学者もいるわ。」

だから、シティにはその”バランス”を調節する人たちが必要だったの。

それが、セキュリティ。

セキュリティはネオ・ドミノシティの治安だけじゃなくて、

その全体の”バランス”を管理している団体らしいの…」

カーリーはメモ帳をパタンと閉じる。

カーリー「シティではセキュリティが禁止カード・制限カードを改定してるじゃない？」

それは、そのデュエルの”バランス”を保つため、らしいわ」

ジャック「ほう…」

カーリー「普通のデュエリストはそのルールの中でデッキを作るじゃない？」

アキ「それはそうね。どんなゲームでもルールがないと成り立たないもの」

カーリー「でも、そのルールに不満を持つ人たちもいたらしいの…
その人たちの中にはディスクやD・ホイールを改造して、
禁止カードをも使えるようにしたり、過激な人たちがいた」

遊星「それがZランクの囚人たち…か」

カーリー「うん。あくまで噂だと思うけど…でも、もし噂がホントだとしたら、

の
セキュリティはそんな人たちを逃しちゃったことになる

アキ「それで牛尾さんが追いかけたんだ…」

カーリー「そんな囚人たちだから、Zランクの独房は地下深くにあるって簡単には抜け出せないそうよ…」

つまり「

クロウ「誰かが手引きしたんだな」

カーリー「そう言われてるわ」

一同少しの沈黙…。

いきなり会場が暗くなる。そして突然スポットライトは一箇所を射した。

5・祝賀会（前）（後書き）

今回は少しキリが悪いので、できるだけ早く次作を載せます；

6・祝賀会(中)

??「lady's & gentlemen!

今宵はネオ・ドミノシティ復興記念祝賀パーティーにご参加いただきありがとうございます!」

スポットライトに当たりながら喋っているのはリーゼントの人、ことDJである。

DJ「このパーティーは、海馬コーポレーション協賛のもとお送りしています!

さらに!今宵のパーティーには今回の危機を救ってくれたシグナーさん達も来てくれているぞ!」

スポットライトが遊星たちに当たる。

キョトンとするアキ。

クロウ「いえい」

すかさずピースサインをするクロウ。

いつの間にかジャックもポーズを決めている。

遊星はさっきの話について考え込んでいる。

カーリー「(私、シグナーじゃないんだけど…焦)」

DJ「まず最初は表彰を行うぞ！」

先月に行われたネオ・ドミノシティデュエルカップ略してNS
Dの優勝者の表彰だ！

まずは、少年の部優勝！クジヨウ・キョウヤー！」

スポットライトが移動する。スポットが当たっている少年は少し怖
がっているようにも見える。

茶色で短髪。中学生ぐらいだろうか？着慣れなさそうなタキシード
が窮屈そうだ。

DJ「次は、少女の部優勝！ノウエリア・レイ！」

スポットライトが移動する。

スポットが当たっている少女はさっきの少年とは違って落ち着いて
客にむかって礼をしている。

ただ、年は同じくらいで、青くて長い髪が特徴的だ。服装はそれに
合わせて青や白で統一している。

DJ「そして、プロの部優勝！ペガサス・J・ロウ！」

スポットライトが彼に当たると会場でカメラのフラッシュと黄色い
声援が飛んだ。

ロウは銀髪で背がスラリと高い青年だった。白いタキシードを嫌味
なく着こなしている。

カーリー「あゝ！あの人、私がさっきぶつかった人なんだから！」

驚くカーリー。プロデュエリストなら記事か何かで見たのだろう。

DJ「3人には、それぞれ海馬コーポレーションより特別の新カー

ドが授与されるぞ！」

初老の男性（海馬コーポレーションの取締役か何かだろうか？）がそれぞれにカードを渡す。
観客から拍手が聞こえる。

ジャック「新カードとは良いな……」

遊星「どんなカードなんだろう？」

クロウ「オレたちも大会に出てみようぜ！」

興味を示す三人。

そしてDJは突然、声の調子を上げながら言った。

DJ「そして、シグナーの皆さんにはこのNDC優勝者と一緒に、
エキシビジョン・デュエルをしていただきます！」

客席から上がる歓声。

ジャックは隣に居たクロウにこそこそと話しかける。

ジャック「（おい…そんな話きいてたか？）」

クロウ「（聞いてねえぜ…まあ、タダで飯は食えないとは思っただけ
ど…）」

遊星「で、どうする？」

遊星がそう尋ねると、ニヤリと笑ってジャックとクロウは言った。

ジャック「ふん！決まっているだろう」

クロウ「売られたデュエルは買うしかねえ！」

遊星「それなら、決まりだな」

遊星の表情が鋭くなる。

アキ「じゃあ、私はこっちで応援してるわね」

カーリー「ジャック、クロウ、遊星、ガンバってね！」

女性陣はそのまま席に座っている。

DJ「それでは、組み合わせを発表するぞ〜！

組み合わせは〜…【ジャックVSキョウヤ】 【クロウVSレイ】
【遊星VSロウ】〜！」

それでは壇上に上がって、デュエルディスクを装着してくれ！」

ジャック「ふん！どれ程の力があるのか見てやろう！」

キョウヤ「よ、よろしくお願いします！（ペコリ）」

レイ「あゝあ…私はジャックが良かったのに」

クロウ「何言ってるんだ？お前はオレで十分だったの」

レイ「ハア…せいぜい楽しませてね」

ロウ「君がああ不動遊星か。君と戦える幸運に感謝するよ」

遊星「楽しいデュエルにしようぜ」

D」「それではエキシビジョンデュエル…開始だ〜！」

6人「『『『『『デュエル！』『』『』『』』」

6・祝賀会（中）（後書き）

とりあえず、今日はこのまじで、

7.そして、エキシビジョンマッチへ【ジャックVSキョウヤ】(前書き)

少々、追加と変更しました；

大筋では変わっておりません；

(【神の恵み】 罨)

7・そして、エキシビジョンマッチへ【ジャックVSキョウヤ】

【ジャックVSキョウヤ】

キョウヤ「(やっと憧れのジャックさんとデュエルできるんだ…!)

」

彼は昔、TVで見ていたジャック・アトラス…キングとデュエルしていると思うと胸が熱くなった。

キョウヤ「ボクのターン！ドロー！…カードを3枚伏せ【マシユマロン】を守備表示で召喚！

ターン終了！」

ジャック「ふん！そんなモンスターではオレの攻撃は防ぎきれんぞ！オレのターン！

手札より【ツイン・ブレイカー】を召喚！このカードは守備表示モンスターを攻撃する時、

2回連続で攻撃ができ、さらに貫通ダメージを与える！いけ！【ツイン・ブレイカー】！」

ザン！！ザン！！

キョウヤ「うわ〜！」

【ジャックVSキョウヤ 4000 VS 1800】

DJ「お〜と！先攻を取ったのはジャックだ〜！キョウヤに大ダメージ〜！」

ジャック「カードを2枚伏せターン終了だ！」

キョウヤ「エンドフェイズに罠カード^{トラップ}発動！【神の恵み】！このカードの効果で、ボクは

自分がドローする度に500ポイントのライフを回復する！ボクのターン、ドロー！」

【ジャックVSキョウヤ 4000 VS 2300】

キョウヤ「手札から【光神機 - 閃空^{ライトニングキア せんくう}】を通常召喚！」

さらに、伏せカードオープン！【血の代償】！このカードの効果により、

ボクはライフポイントを500ポイントを払い、もう一度通常召喚を行える！手札から

【光神機 - 桜火^{ライトニングキア おうが}】を通常召喚！」

【ジャックVSキョウヤ 4000 VS 1800】

ジャック「攻撃力2400のモンスターを通常召喚だと……」

キョウヤ「さらに、500ポイントを払います！」

【ジャックVSキョウヤ 4000 VS 1300】

キョウヤ「ボクは自分の場の【マシユマロン^{フィールド}】をリリースして、

【光神機 - 轟龍^{ライトニングキア とうりゅう}】をアドバンス召喚！」

ジャック「上級モンスターを2体連続で召喚したのか！」

DJ「お〜と！キョウヤは光神機モンスターを一気に3体召喚だ！
今度はジャックアトラス、大ピンチ！」

ジャックの表情が厳しくなる。

キョウヤ「バトル！【ライトニングギア光神機 - 轟龍】で

【ツイン・ブレイカー】を攻撃！」

ライトニグ・サンシャイン！

ジャック「トラップ罠カード発動！【闇の呪縛】！このカードの効果で、【ライトニングギア光神機 - 轟龍】の攻撃力は700ポイントダウンし、攻撃は無効になる！」

キョウヤ「くっ！それなら、【ライトニングギア光神機 - 桜火】で

【ツイン・ブレイカー】に攻撃！」

ライトニグ・バーン！

【ジャックVSキョウヤ 3200 VS 1300】

キョウヤ「さらに、【ライトニングギア光神機 - 閃空】でダイレクトアタック直接攻撃！」

ライトニグ・ソニック！

【ジャックVSキョウヤ 2200 VS 1300】

キョウヤ「そして、【ライトニングギア光神機 - 閃空】の効果で、

ボクはカードを1枚ドロウする！ターン終了！そして、

この時、

ボクの場の光神機は全て墓地に送られる。」

【ジャックVSキョウヤ 2200 VS 1800】

ジャックは俯むすぶいている。

キョウヤはジャックにダメージを与えられたと思っているのか、笑顔だ。

だが、ジャックはピクリとも動かない。

心配になったキョウヤが話しかけようとしたその時、彼はやっとジャックが何をしているのかに気づいた。

そっ…笑っていたのだ。

ジャック「はっはっは！温い！温いぞ！少年！」

キョウヤ「な、何がおかしいんですか！」

ジャック「デュエルはただモンスターを並べれば良いものではない！オレのターン！」

ジャック「大方、場の【血の代償】で攻撃を防ぐつもりなのだろうが…温い！」

そんなものはオレに通用せんわ！」

キョウヤ フィールド場伏せカード1枚【血の代償】・【神の恵み】 手札1枚
ジャック フィールド場伏せカード1枚のみ 手札3枚

ジャック「手札から、速攻魔法発動！【サイクロン】！これでフィールドの伏せカードを破壊！

そして、相手フィールド上にモンスターが存在し自分フィールド上にモンスターが存在しないため、【バイス・ドラゴン】は手札から特殊召喚する事ができる！さらに手札から

【ダークリゾネーター】を通常召喚！お前に本当の”力”を見せてやろう！

王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るが
いい！

シンクロ召喚！我が魂、【レッド・デーモンズ・ドラゴン】！

ジャックの場に【レッド・デーモンズ・ドラゴン】が飛翔する。

ジャック「決着をつけるぞ！【レッド・デーモンズ・ドラゴン】で
ダイレクトアタック
直接攻撃！」

クリムゾン・ヘルフレア！

キョウヤ「ち、【血の代償】の効果を発動！500ポイント払い、
モンスターをセット！」

【ジャックVSキョウヤ 2200 VS 1300】

伏せたモンスターが【レッド・デーモンズ・ドラゴン】の攻撃で表になる。

キョウヤ「セットされた【スケルエンジェル】が表になった時、自分
分はカードを一枚ドロース」

ジャックは言葉を続かせなかった。

ジャック「小賢^{かざか}しい！伏せカードオープン！【破壊神の系譜】！自分のレベル8モンスターが、相手フィールド上に守備表示で存在するモンスターを破壊した場合、このターン、

そのモンスターはもう一度攻撃する事ができる！」

キョウヤ「え、えッ！」

ジャック「これで終わりだ！」

アブソリュート・パワーフォース！

キョウヤ「うわ〜！！」

【ジャックVSキョウヤ 2200 VS 0】

DJ「決まったあ〜！」

エキシビジョンマッチ、記念すべき第一勝目を飾ったのは、ジャックアトラスだ〜！」

7.そして、エキシビジョンマッチへ「ジャックVSキョウヤ」(後書き)

デュルシーンを書くのは結構神経使いますねOTZ

8・閑話(前書き)

テスト終わった(OTZ)ので、復活しましたb b

8・閑話

どこかのキングがどこかの誰かとデュエルしている頃、ネオドミノシテイでは…

…カチャ

ルカ「ルア？起きてる？」

ルカは扉を開けて、ルアの部屋に入った。
手にはリングが盛り付けられた皿を持っている。
自分で皮をむいたのだろうか？

ルア「あ、ルカ。ありがとう」

ルアはベットで起き上がって雑誌を読んでいる。
傍らの机にはルカのデスクが置いてあった。

ルカ「もう！雑誌なんか読んで…病人は寝てなきゃダメじゃない」

ルアは苦笑気味にそう言った。

ルア「だって…結構、気分良くなってきたし」

ルカ「それに…【サイクロン】なんて規制がかかっているカード使っていると、先生にまた怒られるよ？」

ルカは机の上にあるデスクをチラリと見た。

ルカ「ち、違うよ！これは、ボブと戦う時のデッキだって！
…ルカ？今【サイクロン】って何枚までだっけ？」

ルカ「2枚だけど…」。

も〜！先生もいつも言ってるじゃない。

『強いカードよりも賢きプレイング』って」

ルカ「だって強いカードを使わないとなんか物足りないし〜」

口を尖らせるルカ。

ルカ「もう〜…ん？」

それって、『週刊デュエル』の最新刊じゃない？」

ルカはルカの持っている雑誌を指差した。

『週刊デュエル』とはデュエル漫画からプロデュエルの勝敗、解説
まで

幅広く色々なものが掲載されている総合デュエル情報誌だ。

ルカ「そくだよ！ボブが貸してくれたんだ〜」

ルカ「え〜いいな〜。少し見せてくれない？」

ルカ「いいぜ！ルカも一緒に見ようよ」

ルカは持っていた皿を脇に置き、ルカのベットに座った。

ルカ「うわ〜！見て見て、ルカ！ロウは開幕初日からノーダメで勝
ってるよ〜！」

ルカはきよとんとしている。

ルカ「？ ルカ…ロウって、誰なの？」

ルカ「え〜！」

ルカはベットで大げさに驚く。
それでもまだきよとんとしているルカ…。

ルカ「ロウを知らないの!？」

ロウはあの有名な、デュルモンスタースの創設者 ペガサス・
J・クロフォードの子孫で、去年のプロデュエル界では勝ち数、勝
率、ともに1位の大スターだよ!？」

ルカ「だ、だって…私、あんまりプロのデュエルみないし…」

ルカ「まあ、確かにあんまり中継ないよな〜…でも、ホントに知ら
ない?」

ルカ「うん。初めて聞いた」

う〜ん、と唸るルカ。

ルカ「じゃあ、ロウの”奇跡の復活”も知らないよね?」

ルカ「うん」

ルカ「ん〜…」

再び唸るルア。

ルカ「なんなの？その”奇跡の復活”って？」

ルア「うん。プロデュエルって、リーグ制ってことはルカも知ってるよね？」

ルカ「うん。

ルア「やっぱりプロとなると同じ相手と何回も戦うから、デッキはある程度バレちゃうらしいんだ」

ルカ「ふ〜ん」

リーグで何回も同じ相手と戦うのだから、バレるんだろうな〜と、ルカは思った。

ルア「それで、そのデッキが強ければ、強いほど他のデュエリストたちに”対策”を練られるんだ」

ルア「対策？」

ルア「そ。例えばクロウの使ってる【BF】には【聖なるあかり】が天敵だよな。

例えばクロウとデュエルをする時だけ、あらかじめ【聖なるあかり】をデッキに

3枚入れておく感じかな」

ルカ「そんな〜。それって、なんかズルくない？」

ルア「まあ、それほど必死なんだよ。プロは勝たなきゃ生き残れないしね」

昔もロウは凄く強かったから、すごい対策を練られて…
一時期は”不敗”とまで言われたロウが、まったく勝てなくなっただ。

でも…」

ルカ「でも？」

ルア「去年、ロウは全戦全勝。あれほど対策を練られてたのにいきなり復活したんだ。

それが」

ルカ「”奇跡の復活”？」

ルア「そ」

ルアはそう言っでルカに『週刊デュエル』を見せた。

ロウは、4000 VS 0で勝っていた。

ルカ「でも、いきなり何でそんなに勝てるようになったの？」

ルア「それは、ロウは自分のデッキを進化させたからだよ！」

ルカ「何をやったの？」

ルア「ふふん それはね…」

8・閑話（後書き）

待っててくれた方々、本当にありがとうございますm
|
| m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5135q/>

【遊戯王5D's】をかってに映画化してみた【デュエルもあるよ!】

2011年10月6日23時01分発行